

《試論》

ドイツ三月前期の民衆運動

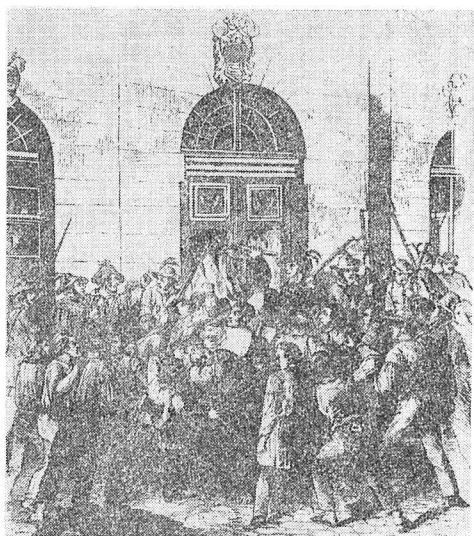
—行動様式について—

一 一八四八年六月一四日ベルリン

前年四月に「ジャガイモ革命」を経験したベルリンは、一八四八年になると「三月の闘い」を筆頭にして幾度か街頭を席卷した民衆蜂起に見舞われるが、それらの一つ、六月一四日午後から深夜にかけて起きた民衆による「兵器庫襲撃 Zeughaussturm」事件はいくつかの興味あるエピソードを含んでいる。①ここでエピソードというのは、叛徒らの示した街頭における行動様式についてである。先づ、午後から夜にかけて市内をあちこちへ自由に動き回った時の彼等のみせた際立った街頭における行動力と集団の高い流動性がそれである。それによってプロイセン国民議会会場のあ

若原憲和

る中心部から南西部の軍事省、東南部にある刑務所へと蜂起の場面は時間単位で推移していく。②さらに、ここで取り上げたいのは夜八時以降兵器庫から正規軍の守備隊約一五〇名と市民軍を撤退させた時——一時的にせよこれは叛徒にとつてまぎれもない成果であった——に用いた手段、やり方である。正規軍の撤退要求は、この時立憲クラブや民主クラブ等の市内の各政治組織とも一定のコンセンサスを得ていたけれども、兵器庫外部を守る市民軍に対してこの正規軍撤退と庫内搜索の要求を突きつける時、民衆側は暴力的衝突を出来る限り回避してむしろ結集した集団の圧力を背景に「煽動者」が市民軍指揮官と直接「交渉」するのである。事件後間もなく逮捕されたある煽動者は、兵器庫裏側の鋳造所で対峙

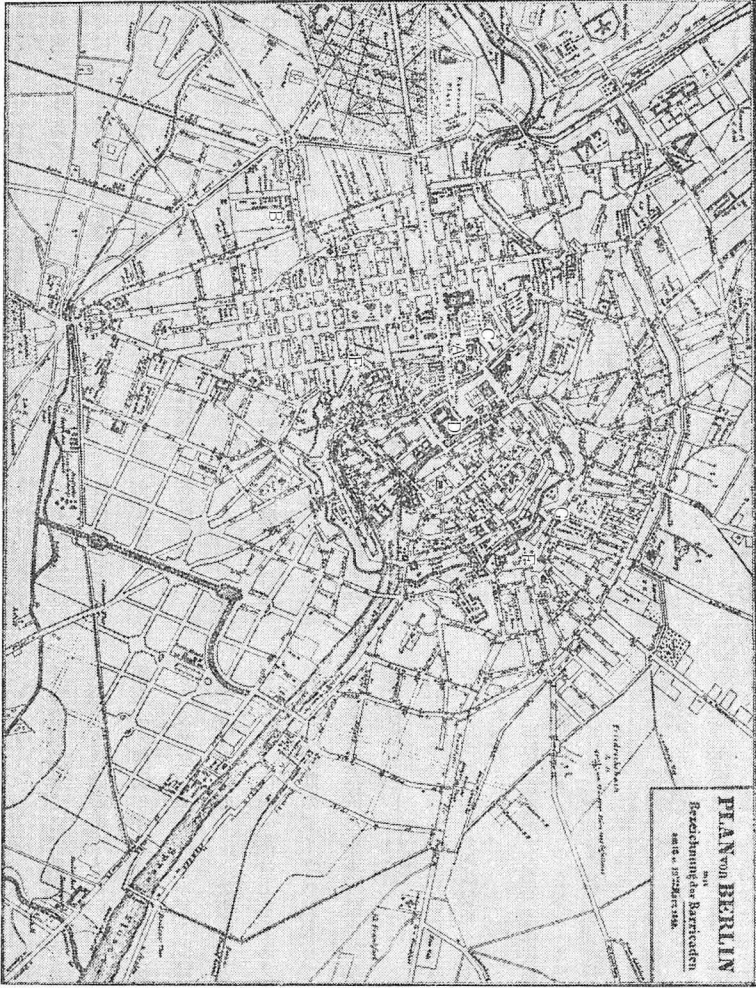


ベルリン兵器庫襲撃 (1848年6月14日夜九時すぎ)
典拠 *Illustrierte Geschichte der deutschen Revolution 1848/49*, 1973, Berlin, S. 151.

する市民軍側の指揮官（大隊長）に対して、「俺達を射殺しようとしているのではないか」と兵士達に弾丸が配られていないか調べさせたり、また別の中隊長へは、「お前の部下と共に家に帰れ、それだけで群衆は静まるだろう。そうでないと不必要な流血沙汰が起きて、お前の部隊もやられるだろう。」と脅迫の言葉を投げつける。こうした互いに対峙する位置をとって、背後に密集した群衆を置き、これを威嚇手段として用いて直接「交渉」を行なうという行動様式の特徴に注目したい。全く同様の行動が、夜九時

頃庫内に進入した群衆によって正規軍との間にとられるのである^③。ところが、この威嚇的「交渉」の試みは、それが挫折した決定的時点、即ち民衆にとって相手が先に暴力手段（この場合は発砲とサーベルによる攻撃）を行使したと感じられた瞬間、「裏切りノ」という叫び声と共に放棄され、一転して「武器を取れノ」の合図の下、対抗的暴力行使へとエスカレートするのである。この衝撃波はまたたく間に市内全域に伝わり、街頭は各所でバリケードが築かれ、双方の暴力的衝突に見舞われるが、この情況は民衆側の煽動者には「（市民軍の）民衆に対する権威は今や無と化した。情況は変わったのだ。市民軍による発砲で民衆に対する道徳的力 (moralische Macht) は無になつたのだ。」と認識されている。この「市民による民衆への道徳的力」という言葉にも注目したいと思う。民衆にぎりぎりまで「安寧と秩序」の破壊を思いとどまらせて暴力行使をくい止めていた「道徳的力」とは一体何であろうか^④。

一八四八年六月一四日、革命下ベルリンに起こった最初で最大の民衆蜂起を事態に則して追跡していくと、各局面の中に以上のような興味あるエピソードが見い出されるのである。それらを要約すれば次の如くになる。 (一) 街頭の集団の高い流動性と行動力、 (二) 脅迫的「交渉」の努力と、相手の拒否と「裏切り」攻撃に瞬時に反応した限定的暴力行使——平和的交渉から防衛的暴力への転



A: 兵器庫 B: 軍事省 C: フロイトセン国民議事堂 D: 王宮 E: 刑務所
 F: フレキサンダー広場 G: ベンダ邸
 典拠 E. Kaber, Berlin 1848. Zur Hundertjahrfeier der Märzrevolution in Auftrage
 des Magistrats von Groß-Berlin, 1948 Berlin.

換、(三)市民の民衆に対する道徳的力の保持と喪失。これらの特徴を見て感じられるのは、民衆側の行動様式が各局面において突然変異的に生まれ出ているのではなくて、むしろ一種の儀式的手続きとして選り取られているという点である。更にこの場合、街頭における民衆にはあらかじめ指導的組織が介入・関与した形跡はなく、ましてこの種の組織（例えば民主クラブ）によって計画が練られていたわけでもなかったこと、むしろこの種の組織はこの日民衆蜂起の圏外にはじぎ飛ばされていたといえること、そして民衆とここで呼んで

きた集団が特定の構成要素からではなく、手工業職人、徒弟、学生、婦人労働者、日雇い等々の下層住民の雑多な要素から成っていたこと、これらの事実を勘案したならば先の三点にわたる特徴は非常に興味あるものとして映る。すなわち、現代の我々には想像だに出来ないほどの群衆の行動力——あるいはこれは活力と言ひ換えるだろう——、結集力を持ちながらもその一方で無秩序ではなく、また暴力も一種の儀礼的な手続きに従って行使される、そのような民衆運動の姿に出会うのである。

このような街頭における民衆運動が示す行動様式の顕著な特徴は、一体どこから、どのようにして生まれ出てくるのだろうか。これだけの結集力と行動力が、あらかじめ組織的介入や準備もないという条件の下で、それも雑多な下層住民を成員としながら、どのようにしてその形成が可能となるのか。たしかに六月初旬は国民議会が三月革命の承認を拒否するという事態の中で極度に緊張した政治的情況下にあったけれども、この日の民衆運動が見せた行動様式の顕著な特徴は、そのような条件を加味してなお特筆に値すると思われる。仮に民衆運動に固有の論理があるとするならば、このような特徴はこの固有の論理に従って生み出されてくる筈である。そこで問題になるのは、この固有の論理、即ち行動のロジックの内容であらう。一体どのような行動のロジックが

民衆運動の行動様式に働いているのか。それともよくいわれるようにそれは「自然発生的」に生まれてくるのだろうか。本稿ではこの問題について考えていくことにするが、もとよりその必要十分な解答をここで明示することは容易ではないし、またそれは本稿の直接的課題でもない。ここでの課題は、この問題について何らかの解明の手懸りを従来の研究成果の中から得ることにあり、そのために出来る限り本稿の問題関心に沿って多くのものを整理、利用して模索のノートを書くことである。

そこで、行論の都合上とりあえず視野を一八四八年のベルリンから三月前期のドイツへ拡大して、この時期の民衆運動についての研究の包括的な整理、就中行動様式に関する所説の整理から出発することとしたい。

① 本件についての詳細は拙稿「四八年革命におけるベルリン民衆運動——六月一日兵器庫襲撃をめぐる——」(『西洋史学』第二二八号)を参照されたい。

② 事件関係地図を参照。屋頂民衆は図中C—DからAに移動し、午後四時にはB、そしてEへ舞台を移す。再び兵器庫Aには午後五時頃戻ってくる。夜八時の武力衝突の後総蜂起的情况になると、更にF—Eへも民衆の結集が起こる。

③ この「交渉」のやりとりは事件公判(七月二日以降連日開催)への被告人陳述と証言を掲載した次の新聞記事から再構成した。Vossische Zeitung, Nr. 154-160, 7/13-7/19; Der Publicist, Nr. 55, 56, 57, 7/13, 7/15, 7/18, 1848 Berlin; Vgl. Adolf Wolff, Berliner Re-

olutions-Chronik, Darstellung der Berliner Bewegungen im Jahre 1948 nach politischen, sozialen und liberalischen Beziehungen. 3 Bde. Berlin 1851-54. Bd. 3, S. 269.
 ④ Wolff, Bd. 3, S. 271.

二 研究史の概観を通じて

ドイツ三月前期の民衆運動史研究がR・テイリーやH・フォルクマンによって西独で本格的に開始されたのは、一九七〇年代に入ってからであるが、それ以前に既に英・仏両国では一八、一九世紀を中心にした民衆史研究が大きな成果をもたらしており、『機破壊者たち』を著したE・J・ホブズボームを筆頭にG・リュード、E・P・トムスの名を躊躇せず上げることができる。

また、フランス革命期の民衆運動についても、A・ソプール、G・ルフエーブル、それに先述のリュードによる「革命的群衆」やサン・キュロットの行動形態、動機、観念を中心にした膨大な研究の蓄積がある^①。これらの歴史家達によって明らかにされた論点の一つに、ル・ボンの盲目的非合理的群衆行動論の否定があるが、リュードはその論点にかかわらせて、一九六四年に出版した『歴史における群衆』の著書の中で「前工業時代」から「工業時代」への移行期における群衆行動の形態変化についていくつかの特徴を析出した。それらの中で労働組合指揮下のストライキや政党の

組織するデモンストレーションなどの工業時代における近代的な運動によって克服されていく食糧暴動や職人ストライキなどの前工業時代の群衆行動は、蜂起のための固有の恒久的組織や計画が予め存在するのではなく、市場や街頭で何らかのきっかけが引き金となって一挙に拡大し、一大暴動事件へと発展してしまふ、全く予測不可能な行動であり、リュードによればこのような行動の特徴は「自然発生的」と形容されるのである。従って工業時代への移行に伴って、この「自然発生的」群衆行動は影を薄めていき、代わって「組織的・計画的」行動が支配的特徴となっていく、とされたのである。このようなリュードの捉え方を二分法的図式と呼んでさしつかえないであろう。また、トムスは主著『イギリス労働者階級の形成』（一九六三年）と論文「一八世紀イギリス群衆のモラルエコノミー」（一九七一年）において、前工業時代の典型的群衆行動である食糧暴動に関して言及し、リュードほど単純明解ではないがそれが多かれ少なかれ「自然発生的」に起こされていること、しかもそれには固有の目標と規律が具備していて高度な組織や指揮回路は不必要であったと指摘している^②。リュードの説と異なる点は、このような高度な組織や指揮回路を不必要とするのは、食糧暴動の背後には民衆文化、即ち地域共同体に支えられた「モラルエコノミー観念」が強く介在しているからである、

という明確な主張にあるが、それによってトムソンの「自然発生性」という用語はこの民衆文化と結びつけられて、より広い意味で使用されている。またリュードと並んでトムソンも、伝統的行動様式が民衆自身の記憶と伝承によってパターン化されており、日常生活における様々な相互扶助的の社会関係やインフォーマルな情報伝達手段の実際など地域共同体の慣習や規制が食糧暴動に強く絡んでいることを指摘するが、他方でこの日常生活のあり方が「自然発生性」と具体的にどのような関係を結んでいるのか、あるいは群衆行動の「自然発生性」という用語自体の意味内容がそのことによってどのように変化するのか、というより踏み込んだ問題は両者によって追究されないまま残されている。

さて、一九七〇年代に開始された西独の本格的な民衆運動研究——一般にこれは社会的抗議 *sozialer Protest* と呼ばれている——の中で、問題として行動様式がどのように追究されているのか、この点について論じる前に西独の社会的抗議研究の全体的情況と問題点を要約的にスケッチしておこうと思う。^④

先づ、西独の社会的抗議研究はH・U・ヴェーラー、J・コックを旗手とする西独社会史の勃興と共にこれに規定されて開始されたといえる。それによってアメリカ社会学のシステム理論、社会紛争理論を武器に、近代化過程における社会緊張を測定する目

的のために、社会的抗議は即ちこの緊張の指標として第一義的に評価されることになったのであるが、そこからは次のような問題が生まれてくるのである。社会的抗議が社会緊張の指標として見做されること自体に異論があらうはずはないが、問題は指標としての価値評価の限定と論理回路の妥当性である。社会的抗議の背景にある経済的、社会的ないし政治的原因を確定するためには文字通り必要十分な因果律に則って、抗議する民衆の言葉と行動を通じてそれらを表現しなければならないが、この制約によって、抗議する民衆はこれらの客観的原因を現代の社会学者、経済史学者に正しく伝達するべきメッセンジャーへと一面化される傾向を帯びてくる。勿論それ故に西独の社会的抗議研究には「上からの社会史」としての固有の自己主張が認められるのであるが、その反面で動機や目的概念といった抗議の内面世界と行動様式に関する問題領域は主要課題として主体的に取り組まれているとはいえないのである。^⑤

このように消極的な取り扱いは免れ得ないわけではあるが、R・テイリーとH・フォルクマンによって三月前期の民衆運動の行動様式がどのように追究されているのか、以下彼らの所説に沿って概観しておくことにする。

先づ、R・テイリーの指摘する三月前期の「社会的抗議」の特

徴は次の五点に要約される。^⑥

(一)一九世紀中葉を画期として「純粹な群衆」simple crowd から特定の職業集団へ構成要素が変化する。この変化は共同体的体験の稀薄化、それと同時に市場的体験の濃密化を背景にして起きている。

(二)組織的行動の発生率は、(一)の変化に対応して上昇し、これは労働組合組織の成長にほぼ符合する。と同時に、暴力的形態から非暴力的形態への移行も進む。

(三)固有の自己利益の実現を目指す特定の社会集団は、しばしば共同体的な規律と非暴力的性格を持つが、この集団が自己にとって不合理・不公平な状態を正そうとする際、最終手段として暴力を用いる。

(四)暴力の対象も無差別ではなく、大抵選択されており、目的意識的な対象と手段の設定が見られる。

(五)従って、行動様式には一定の合理性と政治的性格を認めるべきであり、「盲目的な憎悪の産物とか邪悪な陰謀家による操作、あるいは単純な窮乏化の反映という見方を否定するべきである」。

以上、ティリーの指摘する行動様式の特徴のうち、(三)、(四)、(五)は一八世紀の前工業時代の群衆行動を示すものであるのに対し、(一)と(二)は近代的抗議形態への移行を示唆するものである。いうま

でもなく、これらの指摘はG・リューデの群衆行動論に結びついてくる。

次のフォルクマンの場合も、ティリー同様にリューデの所説に基づいて立論されている。「抗議手段」のカテゴリーとして三つの類型に区分された行動形態を挙げると、次の如くである。^⑦

(一)抗議の対象（個人、制度の代表者）に対する暴力の行使、あるいは威嚇により根底にある紛争を表現する——騒擾的行動。

(二)不満の根拠と対案を明示し、数多くの、しかも統一された要求行動に委ねる——デモンストレーション。

(三)法律と習慣によって裁可されている履行を集団で停止することにより、目的を実現する——拒絶。

以上の三つのカテゴリーに類型化された抗議手段は、実際には各類型の混在によって実現されるが、多くの場合(一)・(二)・(三)へ発展するものとされる。また、この発展に伴って集団規模と構成内容は変化していくとされている。ティリーの指摘を前提にして、フォルクマンの定式化された行動様式論を考えてみるならば、両者に共通して見られる論点がある。それは、G・リューデに依拠して、三月前期を伝統的抗議形態から近代的抗議形態への移行期と捉える基本的シエーマである。このシエーマについてフォルクマンは次のような現象を「この形態変化の諸条件を分析するのに

かなっているが、「重要で、しかも説明困難な」問題として明示している。現象というのは、「三月前期では自然発生性と組織性がけつして排除しあうわけではなく」、「自然発生の行動には往々にして規律と整合性が強く表われるし、また組織的行動も自然発生の行動を強く伴って実現されている」という特異な現象のことである。この移行期特有とも思われる、自然発生性と組織性の共存現象をどのようにして説明するのか。G・リュード流というなら、伝統的な前工業時代の群衆行動と近代的な工業時代のそれとが、一方は残存物として、他方は新たな生成物として調和的に共存している状態と図式化することができるだろう。フォルクマンの説明は、このような図式に基づいて移行期をそのまま細分化して四つの類型に分け、これらが継起的に連続発展していくというロジックで行われている。伝統的行動形態から近代的なそれへの移行は、いわば四つの小さな類型の移行を集積したものとして説明されるのである。これらのうち最も伝統的な形態を表示する特徴は、〈自然発生的、無秩序的、匿名的、無規律的〉とされ、これに對置される最も近代的な形態は、〈計画的、準備的、均質的、整合的〉の諸特徴によって示されている。そしてそれらの具体例として、全き意味でのアナキー的民衆暴動と労働組合あるいは政治党派によって組織され、準備された労働争議、示威行動が對

置されるのである。^⑧

しかし、こうした類型論方法によってはたして伝統的行動形態から近代的なそれへの移行過程が十分に説明されるのであろうか。筆者はそのような類型論的方法には疑問を感じざるを得ない。なぜなら、そのようにして四つに細分化された類型自体のうちに、伝統的諸特徴と近代的なそれが混在するものが必然的に生まれてくるからである。例えばフォルクマンが第二番目の類型として示しているその特徴には、自然発生性と組織性に関連する特徴がやはり混在していることを指摘することができる。では、何故このような〈伝統―近代〉類型論が「社会的抗議」の行動形態論に登場してきたのか、それはいうまでもなくG・リュードの二分法的群衆行動論と関わっている。先に触れたように、ティリーとフォルクマンは「社会的抗議」の行動様式、即ち行動形態、発生諸条件の問題領域にG・リュードの二分法的群衆行動論を導入したのであるが、その際リュードの所説をほとんど無批判的に図式化して撰取したことによって、もともとリュードの所説に伏在していた問題がよりはっきりと露呈せざるを得なくなっているのである。予め準備された「計画」と恒久的「組織」の存在を主メルクマールとする工業時代の「社会的抗議」に対して、これの明白な否定的規定性として前工業時代の群衆行動の性格を「自然発生性」に収斂させ

る結果、リューデが用いた「組織性」と「自然発生性」の両概念はフォルクマンらにおいてはより一層単純化された対立概念へと昇華されてしまったのである。いうまでもなくこの単純な二分法的図式は、近代化理論における「伝統—近代」の枠組の中に組み入れられたのであるが、この図式のもつ問題点は何よりも先づ「自然発生性」が「組織性」ないしは「計画的性」によって必然的に克服されていく、という理論的前提そのものである。さらに問題点はこの前提が前工業時代（＝伝統社会）から工業時代（＝近代社会）への社会移行論と重ね合わされることによって、「社会的抗議」は近代化と共に「合理化」され、「制度化」されてついには社会に囲い込まれていくという目的論的近代化論のテーゼに還元されてしまふところにある。^①なぜならこのような二分法的図式に従うならば、前工業時代の「社会的抗議」、即ち群衆行動が、労働組合や政党などのそれ自身が「合理化」され「制度化」された組織による計画的な抗議行動を典型とする近代的行動形態から、否定的かつ適時的に演繹された行動形態として説明されるからである。

では、このような二分法的図式にもとづく類型論的把握に代わって、本稿冒頭で例示したような一八四八年六月一四日のベルリン民衆運動に見られる顕著な行動様式のあり方は一体どのように説明したらいいのだろうか。

① ここでは一九七〇年以降の西独の主要な研究のみを挙げておく。

Richard Tilly, *Popular Disorders in Germany in the Nineteenth Century: A Preliminary Survey*, in: *Journal of Social History* 4, 1970, S. 1-41.; Ders. u. a., *The Revolutions Century 1830-1930*. Cambridge 1975.; Heinrich Volkmann, *Kategorien des sozialen Protests im Vormärz*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 3, 1977, S. 164-189.; Ders. *Wirtschaftlicher Strukturwandel und sozialer Konflikt in der Frühindustrialisierung. Eine Fallstudie zum Aachener Aufbruch von 1830*, in: P. C. Ludz (Hrsg.), *Soziologie und Sozialgeschichte. Aspekte und Probleme*, Köln 1970. 筆者は「西独」の研究情況と英・仏の民衆運動研究の間の方法論と視点に關して、その相違点を明らかにしようとした。併せて次の拙稿を参照された。「西独における社会的抗議研究の問題点」『立命館文学』一九八四年四・五・六月号

② G. Rudé, *The Crowd in History. A Study of Popular Disturbances in France and England 1730-1848*, New York 1964. (古賀秀男・志垣嘉夫・西嶋幸右訳『歴史における群衆』法律文化社一九八二年)

③ E. P. Thompson, *The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century*, *Past & Present* No. 50 (1971) pp. 76-136.; his, *The Making of the English Working Class*, London 1963.

④ 西独での研究の発展は現在までのところ二つの大きな流れと二期をまわっている。一九七七年 *Geschichte und Gesellschaft*, 3 が社会的抗議研究の特集を行い、ヴェーラー派社会史の一翼を担うことになる流れ、そして今一つは E. P. トムソンらから影響を受けてコンスタンツ大学で始められた共同研究の成果が公刊される一九八一年 (Dieter Groh の編集する *Sozialgeschichtliche Bibliothek* シリーズ) の刊行開始以後の流れである。前掲拙稿を参照のこと。

⑤ このような問題を踏まえて、社会的抗議の内面世界(抗議者の価値観)を重点に、トーン三月前期の諸運動を研究した次の著書を参照のよう。Raier Wirz, *Widerständigkeit, Exzesse, Cravalle, Tumulte und Spandidek, Soziale Bewegung und gewaltthätiger sozialer Protest in Baden 1815-1848*. Ullstein Materialien. Frankfurt/M.—Berlin—Wien 1981.

⑥ R. Tilly, *Popular Disorders...*, S. 20-22.; Ders u. a, *The Rebel-Hous Century...*, pp. 226.

⑦ H. Volkmann, *Kategorien...*, S. 168-170. 本章では「社会的抗議」という用語をデュリールに從ってそのまま使っているが、もとよりこの用語は「民衆運動」という用語の概念とは共通する部分もあるが、その現象を捉える観点において大きく異なっている点に留意しておく必要がある。民衆運動が政治・社会・文化の支配——抑圧体系の中で、それ固有の世界観ないし心性という世界を保持してこの支配——抑圧体系に対抗し、それとの間に絶えざる緊張を孕むものと考えられているのに対して、社会的抗議は何よりもまず現象を集団的な非合法的暴力行動に限定し、あくまでそれをゲゼルンシャフト(=社会)の不安定性・緊張の指標として捉えようとするからである。同様に「行動様式」と「行動形態」の相違も、「行動様式」がたんなる「行動形態」だけでなく、その背後で働く心性・心的態度をも含めて考えるところにある。本稿ではこれらの違いに留意して用語を使うこととする。

⑧ H. Volkmann, *Kategorien...*, S. 171.

⑨ 第二の類型の六つの特徴を次に示しておく。(一)自然発生的だが事の成否を計算し、(二)集団の成権は非均質的だが行動は共同体がもつインフォーマルな情報伝達手段によって整合性を示し、また(三)伝統的抗議の経験によって規律を保持している。更に(四)原因・打倒対象・目的の間に内的関連を持ち、(五)打倒対象は選択されており、無限定ではない。

最後に(六)権威を持つ指導者が存在する。 *Ibid.*, S. 171.

⑩ 例えは「組織化」・「定式化」・「制度化」を労働争議の近代化の主要なキーワードとする Heinrich Volkmann, *Modernisierung des Arbeitskampfs? Zum Formwandel von Streik und Ausperrung in Deutschland 1864-1975*, in: Hartmut Kaelble/Horst Matzerath u. a. (Hrsg.), *Probleme der Modernisierung in Deutschland*, Opladen 1978, S. 110-170. 上記のテーマを労働争議に適用する際には、H.-U. Wehler, *Modernisierungstheorie und Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1975. H. D. Sauerhauer 著 山口・坪郷・高橋訳『近代化理論と歴史学』(一九七七年未来社)を参照。ところで、こうした近代化理論による類型論的移行論のシレンを明解に指摘して、前工業時代の社会的抗議を「無組織」・「無計画」な性格を帯びる近代化理論による定式に対して、これを神話にすぎないと喝破した A. グリーンガーの研究は注目されるべきである。 Andreas Griebinger, *Das symbolische Kapital der Elite. Streikbewegungen und kollektives Bewusstsein deutscher Handwerkgesellen im 18. Jahrhundert*, Ullstein Materialien, Frankfurt/M., Berlin, Wien 1981.

三 「自然発生性」再考

二分法的図式に基づく類型論的移行論に代わって、ここでは民衆運動それ自体がどのようにして生成されてくるか、そのメカニズムとそれに作用するロジックを明らかにするというミクロな視点で「自然発生性」について考えてみたい。

そこで再度G・リューデの行動形態論の中でこの「自然発生性」という用語がどのように用いられ、何を表象する言葉として規定されているのか、改めて確認しておこうと思う。「伝統的抗議形態」は、記憶や伝承により完全に借り物の形式をとることは稀で、比較的小さな発端、例えば偶然の一言や挑発によって起こり、「前もって計画したり予期したりすることができない」ほどの活力をもって大規模に発展していく。こういう場合、「偶然的要素は驚くほど根強い役割を演じた」とリューデは述べている。^①この場合、「自然発生性」とは、抗議が起こる以前に予め計画と組織が用意されていなくても、民衆の直接的知覚と偶然的集団によって、抗議が即座に直接的に実現されていく、という事態を指している。狭い意味で用いるとすれば、それは「偶発性」と同義語になるだろう。しかし、ここでフォルクマンが彼の概念体系の中で「発生諸条件」^②として定義した次のような諸条件を加味して考えるならば、「自然発生性」の意味はよりはっきりとしてくるだろう。この諸条件というのは、潜在的な社会緊張をアクチュアルなものにして、打倒対象をその象徴として明示する直接的契機（これこそ偶発性）だけでなく、更に抗議の成否を予見しうる抗議側の潜勢力、糾合力と秩序側の抑止力、そしてこの両者の力関係に作用する曜日と時刻、最後に抗議側の民衆自身による事の成否の計算、以上

の条件を指している。これらのうち、重要な条件は曜日と時刻であるが、この時間の選択は運動の成否にも大きく関わってくるので、決定的な要素となり得る。三月前期においてはこの時間の選択は概して土曜日と月曜日の夕方に多くなされているという傾向があり、時間の選択は決して偶然ではない。^③こうして、予め計画や組織が用意されていなくても即座に民衆の集団が形成されて発展していくためには、決して偶然ではない民衆による時間の選択が決定的に重要な条件として考えられるのである。そして、この民衆による時間の選択は後で述べるように民衆の日常的な労働—生活世界のあり方と深い関連をもっている。

ところで、運動の場における一見して「自然発生的」と形容される即座の集団形成が、実際は如何にして、どのようなメカニズムに従って実現されていくのか、この問題についても考えておかねばならないだろう。この点については、G・ルフェーブルの「集合心性」論が非常に貴重な示唆と論点を与えてくれるものと思われる。そこで二宮宏之氏の手になる邦訳「革命的群衆」（一九八二年）の中で展開される「集合心性」論を手懸かりにして、「自然発生性」について更に別の観点から捉え直してみたい。^④

ルフェーブルは、通常「群衆」と呼ばれている民衆の集団を、

(一)「単純集合体」、(二)「半意識的集合体」、(三)「結集体」の三つの

レベルで捉えようとした際、そこにおいて次のように「集合心性」の契機を重視している。「(民衆の行動の)原因と結果の間には、実は、集合心性の形成という過程が介在しているものであり、この集合心性こそが、真の因果的連関をつくり出すものなのだ」。この「集合心性」は、個々人の心性の間で働く相互作用を通じて、個々人の心性の単なる総和ではない、独自性をもったものとして形成されてくる、とルフェーブルは強調するのであるが、その際、民衆運動を既に出来上った結果の産物として「結集体」だけを取り出して、それを直ちに一般的な政治的・経済的状况と結びつけているのではなく、両者を媒介する「集合心性」の次元で捉え直していかねばならない、と述べている。この指摘は非常に重要であると思われる。なぜなら、日常的生活のレベルで形成される「半意識的集合体」が、何らかのきっかけが与えられることで急速に自覚的な結集体へと転化する、というルフェーブルの定式は、これまで述べてきた運動の場における集団の内的構造の問題を明確に捉えているからである。ここで改めて行動それ自体を目的とする固有で特定の組織をもたず、またそれによって計画が練られることもない、という意味に「自然発生性」という用語の内容を限定するならば、柴田三千雄氏が言及するインフォーマルな日常的「組織」、即ち社会的日常性そのものである居酒屋、広場、パン

屋の店先におけるそのような集団^⑤は、ルフェーブルのいう「半意識的集合体」であると見做されよう。そこで問題は次に、この日常的レベルでの「半意識的集合体」がどのようにして、どんなロジックによって「結集体」へと転化するのか、ということになる。ルフェーブルの挙げるその転化のための契機は、次の二つである。(一)言葉によるコミュニケーションとして「語らい」と印刷物・チャンネル・演説などによるプロパガンダ。それと共に(二)集団による暗黙の規制作用も集合心性の形成を助ける。又、「結集体」への変容のためには、感性を覚醒させる外的事件の介入(＝直接的契機)が必要である、とも述べている。この点に関して、より深く具体的に追究した研究に喜安朗氏の論文「民衆蜂起の打倒対象」(一九七六年)がある。民衆による自己の生活の場における打倒対象の指定とそれとの徹底的対決が追求されることの「結集体」形成にとっての重要性が力説されるのである。^⑥

今、これらの指摘を三月前期の民衆運動史研究において爽りあるものとして活用しようとするならば、とりあえず「自然発生性」の問題は次のように捉え直すことができるだろう。即ち民衆運動が固有の「組織」をもっていなかったということは、民衆の労働―生活世界の中に何らの「組織」もなかったということの意味するのではなく、民衆の日常生活に根ざしたインフォーマルな集合

体の形成を否定するものではけつしてないということである。換言すれば、「組織性」の有無ではなくて、「組織」のあり方、つまり直接的人間関係あるいは社会的結合関係 *Socialite* のあり方が問題なのであり、蜂起以前に予め「組織」を必要としたか否かはこのあり方の差違にかかわっているのである。^⑦

そしてそのような社会的結合関係の切り結ばれる場には、街頭、公共的広場、市場、居酒屋、職人宿などがあり、そこでは半意識的集合体を形成して支える集合心性が様々なレベルで作用するのである。また集合心性の作用する集合体ないし個々人の間に共通して育まれる価値観念には例えばモラルエコノミー観念、伝統的慣習の正当性観念、自律的空間領域への公権力介入を排除する観念があり、それらの観念は民衆文化の主たる要素でもある。このうちモラルエコノミー観念は、「全き家」における労働と享受、言いかえれば生産と消費の統一的關係を頑固に維持しようとする家族経済の中に存立基盤をもっていた。^⑧ この家族経済は第一義的には家族の成員すべてが良き正しい生活をおくって生きることを意味するが、同時に家族外の社会に開かれた享受—娯楽を通じて社会的文化の再生産を担う単位でもあった。年市、週市あるいは祭り、飲酒、遊戯といった行事、娯楽は生産だけでなく消費を通じて民衆の社会的文化の再生産が行なわれる場であった。こう

して民衆文化は、集合心性の作用する居酒屋や市場などの場、ここにおける社会的結合関係のあり方と共に三位一体の關係にあってと考えることができよう。

以上見てきたような、「自然発生性」概念と決定的な關係にある「発生諸条件」とりわけ民衆による蜂起の時間の選択の意味、そしてG・ルフューブルの「集合心性」論による民衆の日常的労働—生活世界に根ざしたインフォーマルな「半意識的集体」—「組織」の存在の推論、さらにそのような「集合心性」の作用する集団の中で育まれる民衆文化のありよう、これらをトータルに関連づけることによって「自然発生性」概念を再度振り返って考えておこうと思う。今ここで抽象的な議論を繰り返しても意味がないので、三月前期の民衆運動について広範囲に実証的な研究を行なった次の成果にもとづいて整理しておくことにする。

フォルクマンの分析概念体系を下敷にして、三月前期ドイツ地方の民衆運動を一五三例に渡って克明に調べたH・G・フーズンクによると、^⑨ 三月前期では何らかの目的的な組織集団によってではなくて、むしろ共通の労働—生活世界の経験を通じて「自然発生的に」形成された集団によって運動が起こされるのが大多数で、目標が何らかのシンボルを設定することで選択され、相互の情報伝達は *face to face* によってなされることで、事を起こす

以前に一定程度の情況認識が人々に持たれていたという。^⑩これに加えて、何らかの決まり文句が発せられると、人々の糾合と配位が始まり、同時に例えばシラーの『群盜』の一節が唱われて、人々の連帯も昂揚して糾合力も高まっていく。そして事を始めた集団についてもフーズンクは次のように述べる。行動には密度の高い凝集力があり、集団は活動的な中核部分と消極的な取り巻き部分に分かれている。しかし、この取り巻き部分は潜在的参加者として中核部分を防衛しかつ予備軍としていつでも中核部分に転化することができ、ほとんどの場合秩序勢力の登場と同時にこの二つの部分は結合して行動の共同性を実現する、と。^⑪以上のフーズンクの明らかにした成果から、「自然発生的」という用語はもはやリュード以来の「偶発的」という狭い意味ではなくなり、実質的には民衆の共通の労働―生活世界を土台にして形成されている経験による文化（これにはモラルエコノミー観念だけでなく、伝統的慣習権の正当性観念、労働―生活世界への当局の介入による自律的領域の侵犯を防止しようとする防衛的観念も含まれる）とこれを保障する様々な場（例えば祭りの広場と街頭、労働と娯楽の習慣のリズムをつくる酒場、職人にとって自由で自律的な場である職人宿 Heuberge）が運動の「主体」を形成していると推論することができる。すなわち、日常的な労働―生活世界の次元で

既に一定の情況認識と目標がシンボライズされ、流動性に富む集団の組織的萌芽状態（≡半意識的集合体）が空間的・時間的に限定されて生成・持続している、とみなしても言い過ぎではない。このようにフーズンクの克明なケーススタディによって、組織性を現代の我々がイメージする明確なる目的意識・緻密な組織原理に基づく目的集団と同一視しない限り、組織と計画は日常的に、広い意味で準備されていると考えることができる。

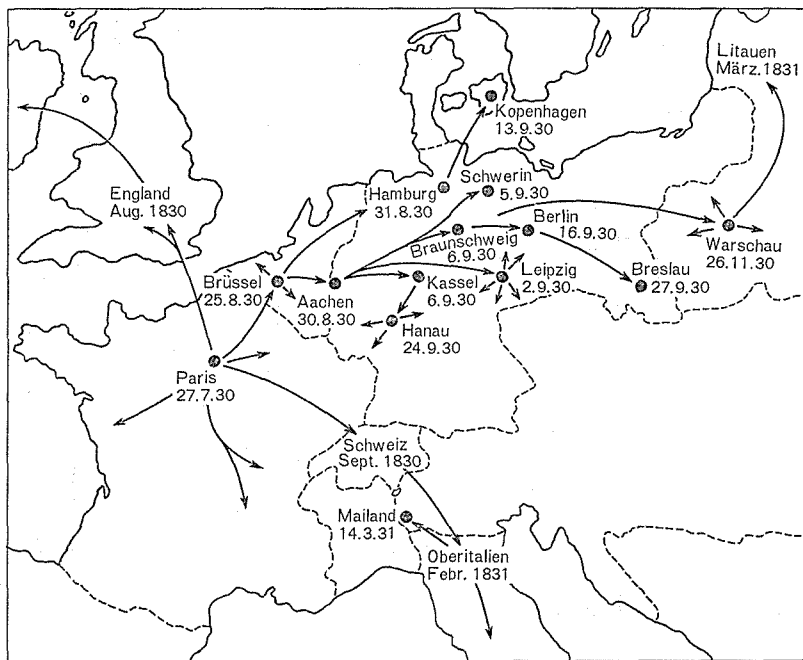
さらにフーズンクの指摘を受けて行動様式を見ていくと、手工業職人のストライキの場合は勿論のこと、運動の大半を占める民衆騒擾、食糧暴動の場合にも全く無条件で「自然発生的」が発揮されるわけではなく、それぞれの階層、職能、共同体の共通の労働―生活世界の経験によって形成されている文化やこれを保障する場が、既に日常的な萌芽的組織形態（≡半意識的集合体）を形作っており、また事を起こすに先立って成算あるや否やを予想する一定の情況認識と標的のシンボルがロコミというインフォーマルな伝達手段で一様に共有されることを通じて、人々の間に集団行動へのロジックともいうべき集合心性が生まれるのである。ここではもはや「自然発生的性」という表現は不適當であり、従来この言葉に附与されて来た「無組織・無計画」「偶発性」という意味はその実態の内容を喪失している。また、リュード以来の二分

法的図式に依拠したフォルクマンの類型論的三月前期移行論は何ら問題を解明する説得力を持っていないこと、むしろそれは問題の再生産にしか通じていかならざること、これらのことは既に述べた通りである。

- ① G. Rude, *op. cit.*, pp. 242. 邦訳三〇三頁以下。勿論リューデは「この「自然発生性」をあまり強調しすぎなげう、噂、憎しみと希望、更に「一般化された信念」や指導者の存在について触れている。
- ② H. Volkmann, *Kategorien ...*, S. 176-180.
- ③ *Ibid.*, S. 177. 「うまやまなご」が「このことは一定の場所、例えば市場や居酒屋に人々がより多く集まってくる」ことが予想されると、このことと密接な関係がある。
- ④ G. ルフエール著 二宮宏之訳『革命的群衆』創文社 一九八二年。その他の「集合心性」に関する研究は以下を通じ、A. Griebinger, *op. cit.*; Michel Vovelle, *Ideologies and Mentalities*, in: R. Samuel/G. S. Jones (ed.), *Culture, Ideology and Politics*. History Workshop Series London 1982, p. 2-p. 11.; W. K. Blessing, *Zur Analyse politischer Mentalität und Ideologie der Unterschichten im 19. Jahrhundert*, in: *Zeitschrift Für Bayerische Landesgeschichte*, vol. 34, 1971, S. 768-S. 816. 喜安朗「労働者階級的生活圏について——摸索のためのノート(1)——」『社会運動史』六号 一九七七年六三一—七二頁。宮島喬「フランス社会党派と集合意識論——歴史における「心性の問題にふれて」『思想』六六三—三六九号 一九七九年九月。これらの論者間には勿論言葉のニュアンスの違いはあるが、とっぴあえずここでは集合心性を、個々人の感性的・身体的経験によって知覚される無意識ないしは意識の領野での欲求、期待、関心、判断など

——意識の下部構造とも呼んでおく——が、集団における個々人の間の言葉ないしは身体による相互作用と融合の過程を通じて、たんなる個々人の総和ではない固有の生命力をもつ体系へと形成されたものと考えられることにする。

- ⑤ 柴田三千雄著『近代世界と民衆運動』岩波書店 一九八三年、二〇六頁。
 - ⑥ 喜安朗「民衆蜂起の打倒対象——一八四八年よりにおける六月蜂起——」『思想』六二九号 一九七六年一月。同「労働者の生活圏と労働運動」『思想』六四五号 一九七八年三月、参照。
 - ⑦ 柴田前掲書 二〇五頁。喜安朗が前掲論文において「直接的人的結合関係」と呼ぶものは、柴田氏によってインフォーマルな日常的「組織」に含められていると考えてよいであろう。
 - ⑧ P. Kriedte/H. Medick/J. Schlumbohm, *Industrialisierung vor der Industrialisierung. Gewerblich Warenproduktion auf dem Land in der Formationsperiode des Kapitalismus*. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1977, S. 138-S. 154.
 - ⑨ Hans-Gerhard Husung, *Protest und Repression in Vornitz. Norddeutschland zwischen Restauration und Revolution*, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1983.
 - ⑩ *Ibid.*, S. 203-S. 211, S. 239-S. 241.
 - ⑪ *Ibid.*, S. 243.
- 四 一八三〇年八月三〇日アーヘン
——ケーススタディ——
これまで展開してきた「自然発生性」、「集合心性」、「民衆文

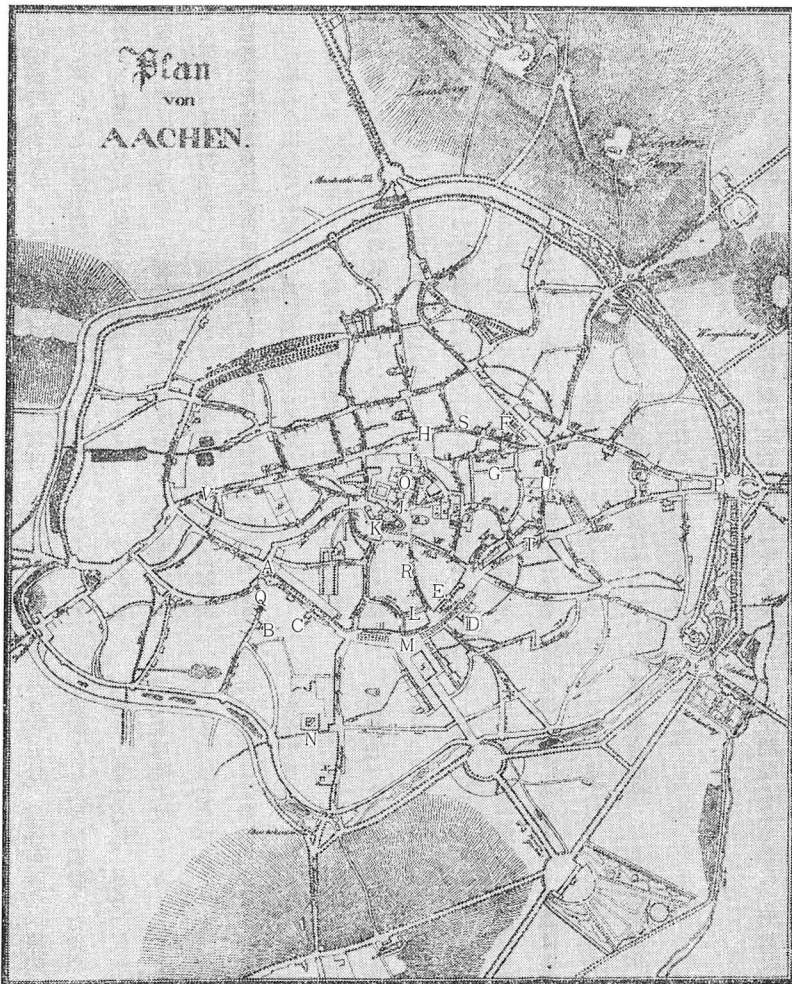


1830年フランス七月革命の影響

典拠 Rainer Wirtz. >Widersetzlichkeiten, Excesse, Crawalle. Tumulte und Skandale<, Ulstein Materialien 1981, S. 89.

「化」の諸論点を具体的事例をつぶさに観察することを通じて検証していこうと思う。もとより民衆運動の研究には「上からの視点」による原因分析を通じて客観的条件の析出、それによる社会の近代化過程、資本主義的生産様式との関連を問題にする立場があることは言うまでもない。また、行動様式の領域に関しても大量のデータを統計的処理した上で一定の傾向を抽出しようとする「上からの社会史」の方法がある。しかし、それらは共通して民衆運動の内面に深く分け入ることを避けようという態度をとりがちである。このような態度では民衆ないし民衆運動を等身大の「生きられた存在」として捉えることは至難のことであるし、本稿が取り上げてきた諸問題を説得的に論じることができない。詳細なケーススタディによってこれに答えようとするのはそのためである。^①

本章で取り上げる事例は、フォルクマンが一九七二年に行なったケーススタディの対象そのもの、即ち一八三〇年八月三〇日曜日、パリ七月革命の余波がヨーロッパ各地に伝播していく過程でアーヘン（ベルギーとの国境にほど近い人口約四万人足らずの都市）に



アーヘン 1830. 8. 30—事件関係図—（図の縮尺は2万分の1）

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| A : 「太いパイプ」の噴泉 | B : ネルエッセンのファブリック |
| C : フリング（機械組立業）の家 | D : コッカリル邸 |
| E : 「エリーゼ」の噴泉・レストラン | F : 監獄 |
| G : シュティールファブリック（機械組立業） | H : 市場、カール大帝像 |
| I : 市庁舎 | J : ビアハウス（醸造所併設） |
| K : 大聖堂 | L : フィンガー酒場 |
| M : フリードリヒ・ヴィルヘルム広場 | N : 兵營 |
| O : アムホーフ | P : ケルン門 |
| Q : メルヘン通り | R : ハルトマン通り |
| S : ケルン通り | T : ペーター通り |
| U : コンベスパート通り | V : ヤーコブ通り |

起こった民衆暴動である。^②これは同日午後一時頃、アーヘンで多数の毛織物業者ネルエッセンのファブリックに押しかけた民衆が、不発に終わった労働争議を後にして、ベルギー出身でアーヘンを代表する有力な毛織物業者で資産家でもあるコッカリルの家敷を襲撃し、家屋だけでなく高価な装飾品や調度品類、家財道具のほとんどすべてを打ち壊した事件であるが、夕方六時頃には民衆側に七名の死者と多数の負傷者、そして翌日にかけて一六六名にも上る逮捕者を出して鎮圧された(前頁の図を参照)。

フォルクマンはこの事件を基本的に(一)初期工業化時代の労働争議と(二)前工業時代に特有の貧民暴動という二つの運動が後者を基調として展開したものと理解するのであるが、その中で特に彼が強調しているのは、この民衆暴動が工業化に伴う伝統的労働生活様式の解体と新たなそれへの統合の際に生じる民衆の価値観、文化に関わる抗議行動ではなくて、低下していく生活水準と失われゆく労働の場に対する経済的な抗議行動である、という点である。即ち緩慢なアーヘンの工業化速度と伝統社会の解放によって引き起こされる労働力予備軍の過剰供給とこれを受容できないアーヘン産業構造の問題として捉えようとしているのであるが、この見方はとりわけ一九世紀前半を解放危機の「社会問題」である「大衆貧窮 Pauperismus」の時代であると考えるW・コンツェヤ

パンコークの見解に沿うものであろう。^③しかし、ここで問題とすべきことは、事件の社会的原因ではなくてアーヘンで八月三日に展開された民衆運動の行動様式であり、そこにおける民衆の集団形成と集合心性、さらに民衆文化の関係を追究することによって民衆運動生成のメカニズムとそのロジックを明らかにすることである。残念ながらフォルクマンはアーヘン「貧民暴動」の動機については民衆的社會秩序観念による正当な社會秩序の再建という表現で言及しているものの、ここで明らかにすべき問題については全くといっていいほど触れないでいる。例えば先に挙げた「初期的」な労働争議がどのようにして民衆暴動に転化していったのか、この点についての説明はたんにその集団の社會構成が変化したことのみ求められている。明らかに、集団の社會構成が変化するのは一定の集団形成の結果であって、何故そのような変化が生じたのかという原因は結果から説明することはできないのである。さて以下この民衆暴動について、先述したように集団形成と集合心性、それに民衆文化の關係を軸にして論じていくことにする。^④

〔一〕

まず問題となるのは、何故月曜日選ばれたのかという点であるが、これはいわゆる「聖月曜日」の習慣と深い關係がある。な

るほど時代はフランス七月革命の知らせが届き、ヨーロッパ各地に革命の呼び声がかどましている状況であったけれども、アーヘンでも八月二七日にここから数時間しか離れていないベルギー都市ベルビエーでラッドイト行動が起こったとの情報が入り、大状況的には革命を予兆する不穏な空気が支配していた。しかし、事件が月曜日に起きたのは偶然であろうか。叛徒らに対する陪審裁判の記録から窺える事実は、既に同月二八日土曜日の午前一〇〜一一時頃市中央の市場で数人の女達によってコッカリルに対する敵対的な罵詈雑言が発せられている点である。「コッカリルをブツ切りにしてやらねばいけない」「腸詰めにしてしまえ」と一人が言うと、別の女が「でも、あいつはひどく痩せていますよ」と返す。すると又、三人目の女が「いや、すぐ太るさ」と話していた。

手工業職人にとって伝統的習慣となっている「聖月曜日」は、朝から酔っ払い、仕事場が公然と居酒屋に変身することのできる日であった。酔っ払った職人達が街頭をうろつき、酒場を次から次へと徒党を組んで気の合う仲間と痛飲する。実際、この日も叛徒らは多くが「酔っ払って」行動しているのである。酒場は、蜂起の際に情報伝達と氣勢を上げる場として重要な役割を演じている。例えば、叛徒らが何度も訪れたフィンガー酒場（フリードリ

ヒ・ヴィルヘルム広場とウァゼリナー通りの角にある）では、二、三〇人の叛徒の団が一度コッカリル邸に立ち寄った後、ビールを飲みきって、「ナポレオン万歳！」「さあ、コッカリルへ行こう！」と叫んでいる。⑦又、事件の主謀者として起訴された織物工のW・ミューラー（二三歳）はフィンガー酒場から数百メートル離れたヤーコプ通りのヨーマス酒場でこの日午後一二時三〇分頃まで仲間数人と共に酔っ払って眠っていると、知らない男に、「ネルエッセンのところで反乱が起こるぞ！」と起こされ、その場にいた者と一緒に現場に向かう。⑧その中で、ここにいた三人はフィンガー酒場にも現われているが、一方逆にフィンガー酒場からヨーマス酒場へ移る者もいたのである。その他、叛徒らが訪れた酒場は記録から見る限り数ヶ所に上っている。仲間と痛飲して鋭気を養うために人々が集まる社交の場としての酒場は、このように日常的な労働―生活の世界で仲間とのコミュニケーションをはかると同時に運動の企てないしは行動の出発点を成す場ともなっているのである。

〔二〕

更にFace to faceのコミュニケーションによる噂の伝播も見ておかなくてはならないだろう。先に紹介した市場で交わされたコッカリル攻撃の会話は、証人のマリア・ジッタールトに伝わるまで

の間に隣人のオフアーマン、義兄のクラウスを通じてキルシュ未亡人に伝えられている。又、数日来ベルギーのブリュッセルからリュティヒ、ベルビューと次第に民衆運動が伝染して起こり、次はアーヘンの番だという噂が市中に広まっていた。^⑮八月三〇日に起こるか否かで賭けさえもが行なわれていたのである。^⑯二七日金曜日には約五〇名の若者が、「ベルギーは生きていますノ ナポレオン万歳ノ」と叫んで行進していたし、二九日には市場でも「ナポレオン万歳ノ」という叫び声が聞かれていた。^⑰更に同日、コッカリル邸の真向いにあるレストランに「俺は革命家だノ」と名の一人の男が現われ、酒をボトル半分飲んだ後にそこにいた者たちにはふるまっていたという。^⑱このような出来事の情報や噂を街頭や酒場で知ることによって、「いつかアーヘンでも」あるいは「三〇日にアーヘンで」蜂起が起こることを期待させるに至るのである。

〔三〕

そして、その蜂起の期待感は先づベルギーでの先例にならって織物工場の「機械打ち壊し」を目論むことの中にそれ相応の解答を見い出している。二八日夜一時半頃、商人ヤンゼンは帰宅途中若い手工業職人の一団（二〇〜三〇人）が「行こうぜノ ケンターの工場に火をつけてやろう。機械のせいであつたはもう干

し上がって生きていけなくなったのだから」と話すのを聞いて^⑲いる。又この一団が翌二九日夜にも先述のレストランに現われて、ケレッター毛織物工場主への制裁を叫んでいた。しかし、この段階では打倒対象はまだ一つに定められるに至らず、ケレッター、ネルエッセンとコッカリルらの毛織物業者の他にもパン屋が候補に上げられている。実際に蜂起の発端となったのは、ネルエッセンのファブリック労働者三人が三〇日の午後仲間呼びかけて、「太いパイプ」と呼ばれている噴泉に集合し、土曜日の賃金支払の時に受けた減給処分の撤回と差し引かれた分の金額を要求する事態が生まれたことであつた。^⑳

この「太いパイプ」と呼ばれる噴泉は、労働者が毎日午後になるとネルエッセンとケレッターのファブリックからやってきて相互の情報交換場所として用いる集合地点となっており、この日常的な社交と集合の場所がこの日もまた減給処分を撤回させようとする労働者によって行動の出発点として用いられたのである。^㉑

だが、午前中にネルエッセンのファブリックの中で交わされた三人の労働者の企みの会話は、仲間によってたちまち口から口へと伝えられて、蜂起を期待していた数百人の群衆が押し寄せたのである。ここでそれまでいくつかの企みとそれらの中に託されて

いた不満や怒り、期待と願望が現実にネルエッセンという一つの具体的対象を与えられることによって、群衆の集合心性は共通のものへと「平準化」され、対象がそれにシンボライズされていくと同時に、一人一人の怒りと不満は一層かき立てられることとなる。ネルエッセンのファブリックの前のメルヘンス通りは群衆で埋まる。しかし、まだルフエーブルのいう「結集体」の領域には達していない。それには治安当局の出現が重要な画期をもたらすのである。警察官と守備隊兵士の出現によって、それまでは一部の活動的部分のみが騒々しく立ち振るまっていたただけなのに、大人しかった同調者の取り巻き部分の群衆もにわかには活気づき、中核部分とこの取り巻き部分が融合し始めるのである。⑦ こうして治安権力の出現によって群衆はより密集した融合状態をとり、治安権力と対峙しようとする。このような集団行動を可能にした条件の一つに「聖月曜日」にまつわる圧倒的な群衆の潜勢力の保障があること、そしてこれに較べて絶対的劣勢の位置が明らかにされている治安権力の存在があることはいまでもない。

「結集体」への変容が可能となるにはこのように群衆の集合心性の中に具体的な攻撃、打倒対象が群衆の怒りと願望の象徴的存在として措定され、それが群衆に対して知覚可能な範囲で大胆に指し示されなければならないが、また他方で治安権力の介入、登

場もこの「結集体」への変容を手伝うのである。

しかし、このネルエッセン前での出来事はこの日に起こるその後の民衆運動との関連で一つの重要な問題を提起している。というのは、ネルエッセンの機械破壊という既に公然と表明された企図が結果的に放棄されて、群衆は建物内に乱入することもなく第二の現場であるコッカリ邸へ移動して行ったからである。⑧ 登場した警官を追うという形式をとりながら、突然「コッカリを倒せ！」という叫び声が発せられ、その声に従って群衆がこの現場を離れてしまうという事態の中に民衆運動の変幻自在な性格を見い出すこともできるが、問題はより深刻であって、この事態を民衆運動の集合心性そのものの問題として考えておく必要がある。

即ちネルエッセン前にやって来た人々の集合心性は、ネルエッセンの機械ないし滅給処分自体を彼らの不満と願望を十分にシンボライズする打倒対象として措定するまでには至らないで、コッカリの方がむしろ彼らの集合心性に合致する打倒対象として選択されたのではないか、という問題である。このことは民衆文化の一つの傾向である、〈生産―労働〉よりは〈消費―享受〉という生活の領域に対して比重が置かれることと関連があるだろう。そして、この事態ともっと本質的で直接的な関係にあると思われるのは、ネルエッセン前にやって来た人々の構成である。たしかに

蜂起の発端となったのはネルエッセンで働く三人の労働者による呼びかけであったけれども、そこに実際にやって来たのは彼らの期待に反して圧倒的に「賤民」であった。逮捕後、容疑者として勾留された一三三名の内ファブリックで従事していたのはたった四名であり、平均年齢二八歳の大部分は靴職人、屋根職人、床屋職人、仕立職人、建築職人らの手工業職人と、アーヘンの主要産業の毛織物業関係に従事するファブリック外の問屋制家内職人（剪毛工、職工、染色工）、それに日雇い労働者（農業との兼業で生活を支えるのがやっとなつた）^⑭であった。従つて、ネルエッセンの機械と減給処分自体に直接抗議しようとする当初のアジテーターたちの企図は、やはり部分的で直接的なシンボルにとどまらざるを得ず、群衆の集合心性の中にネルエッセンに対する全体的な悪のイメージを十分に喚起することができなかったと推論できる。こうして前述の呼びかけをした労働者は間もなくアジテーターの役割を他に譲り渡して群衆の中に姿を消す。

〔四〕

ところで蜂起の各場面できり返し叫ばれる「ナポレオン万歳」という言葉は一体何を示唆するだろうか。それは蜂起が一八三〇年という時点において、ナポレオン伝説の広くゆきわたっていることの証左であることを示している。それはまた、伝承によって

踏襲される様式をも表現している。アーヘン蜂起が突発的に起きたわけではなく、またアーヘン固有の経済的社会的状況のみから帰結したのでもない、パリ七月革命の連鎖の上に起きている事実がこのことを傍証している。勿論そこにはフランス革命やナポレオン伝説だけでなく、形式的には伝統的行動様式が枠組みとして残されている。^⑮

〔五〕

それでは叛徒の「動機」についてはどうであろうか。「動機」もまた日常的な社会生活だけでなく集合心性の形成とは容易には切り離すことのできない領域である。先にも述べたようにネルエッセンのファブリック前で行なわれた演説には減給処分の撤回だけでなく、機械の破壊とパン価格高騰の当事者パン屋への懲罰が含まれていた。又、二七、二八、二九日の三日間に街頭や広場で口頭で表明された不満もこれらの三点に各々分たれていた。従つて、それらが一ヶ所で合流しさらにそれらを超越するようなより上位の包括的イメージがそこから生み出されない限り、集合心性が群衆一人一人に共通して形成されることはないのであるが、そのための契機を「コッカリルを倒せ」という叫びが提供したのである。この言葉がイメージするものは、先づコッカリルがアーヘンに先駆的に一八〇七年に既にイギリス式の紡績機械を、又続いて

一八二二年には新式の機械を導入した父を持ち、一八二五年にア
ーヘンに移り住んではからは精力的に当地の毛織物産業の機械化と
取り組んでいたという客観的事実を背景にした、機械化を推進す
る時代の新機軸の張本人というイメージであり、第二に一八一三
年にアーヘン有数の毛織物・針産業のファブリカント、パストー
ルの娘と結婚し、三階建の豪邸を構える有力な資産家^②金持ちと
いうイメージであり、第三にベルギーの隣接都市ベルビューの民
衆蜂起の報が伝わった直後、最も積極的に蜂起に対抗するための
市民武装^③市民軍の設立を提唱した、市民的秩序の維持に心を砕
く秩序派のリーダーというイメージであろう。ネルエッセンの勞
働者がそのアジテーターの地位を放棄した後、新たに登場したW
・ミューラーは、自分の姉がこのファブリックに雇われているに
もかわからず、ファブリック内の染色親方のシュテッフエンスが
五〇ターラー配るから群衆を静めてくれるよう求めた時「俺達ほ
もうお前の金など要らぬ。すでにお前らと戦争を始めたんだ^④、
とこの申し出を拒絶する。この交渉の拒絶はネルエッセンがす
でに打倒対象のシンボルではなくなり、滅給処分や機械導入によ
って富を蓄えたファブリカントの中で最も象徴的存在であるコッカ
リルが頭に描かれていることを意味している。ここで重視しなけ
ればならないのは、彼らが打倒対象を指定する際に労働の世界だ

けでなく、生活の世界の問題として消費の次元をも含めて捉えよ
うとしている点である。「コッカリルを倒せ^⑤」という言葉は、
このような意味で、賃金のピンハネと機械導入によって私腹を肥
やす悪徳商人（金持ち）の典型という像をつくり上げたのであろ
う。この悪徳商人というイメージは叛徒の一人ファンデンヒルツ
がコッカリル邸へ行く途中にゲベール銃を奪うため立ち寄ったピ
アハウスで叫んだ次のような言い方の中に明確に表現されている。
「金持ちはすべて打倒されねばならない。労働者がこれ以上生
きていけないようにしたのは奴らなんだ。もし俺に一〇〇丁のゲ
ベール銃があったら、その一丁づつで金持ちを射ち殺してやる。」
また、リーダーの一人と目されるブレンペラー（二八歳の針製
造人）はフィンガールの酒場で「さあ、コッカリルのところへ行こ
う^⑥」と煽動する一方で、ファンデンヒルツと共に立ち寄ったピ
アハウスで、静めるよう説得にやってきた司祭のクレッセンに向
かって、次のように主張している。
「かつて司祭様は、皇帝や国王といえども教会の課した罰に服
さねばならなかったと説かれた。しかし今はただ貧民のみが裁か
れている。一体誰が商人を罰してくれるんだ。だから俺達が商人
を罰しなさいいけいんだ^⑦」

「明朝までにはすべてを良くしてやる^⑧」

ファンデンヒルツやプレムベラーの他にも、「いかさま師」、「ペテン師」といった蔑称を商人にファブリカントに向かつて投げつける者を挙げる事ができるが、このような言い方の中に叛徒として民衆が行動に打って出た時の心性が比較的くつきりと現れているといえるだろう。悪徳商人にピンハネされた善良な民衆は損害を被り、日々虐げられ続けているという構図の下で、貧民の苦境を救い、悪徳商人を罰することで自ら不正義を正そうとする。こうした暴利をむさぼる者に制裁・懲罰を課すという民衆的正義の観念は、E・P・トムソンのいう「モラルエコノミー観念」に相当するものと見做すことができる。この点に關していえば、一八三〇年春の農業不作による穀物価格の高騰という事実は確かに存在し、七月末から八月末にかけての約一ヶ月間にアーヘンでは約三分の一もパン価格が上昇しているのであるが、この事実に対する民衆の観念は、当初パン屋の懲罰という形でアジテーションがなされたにもかかわらず、それを包摂する商人一般の典型的悪徳像によってとって代わられていると考えることができる。

このようなモラルエコノミー観念に支えられた民衆的正義の実行は、後にアーヘン監獄を襲って囚人を解放しようとした行動にも窺うことができる。当時監獄には二八〇人の囚人が収容されていたが、(刑事犯の三七人を除いて庄倒的に)そのほとんどは窃

盗や公権力への反抗によって捕えられた者達であったといわれている。そして、叛徒のW・ミューラーやプレムベラーだけでなく被告七四名の内何と三一名が窃盗罪や公権力への反抗による前科を重ねているのである。日頃は富の象徴を貧民に誇示するように御者付きの馬車を乗り廻していたコッカリルからそれを奪い、染棒とらしゃで急造した赤旗をくくりつけて叛乱のシンボルとした叛徒らは、これに乗って市中を走り、監獄に乗りつけて、「囚人を釈放しろ!」、「自由は生きている!」、「ナポレオン万歳!」、「自由と平等!」と叫ぶ。革命とナポレオンの渾然一体とした伝説的イメージが彼らの行動様式を規定する先例として捉えられ、彼らはそれを決まり文句を発する形で追体験しているかのような振舞いを見せるが、しかしこれは多分に儀礼的行為であると解釈するべきであろう。

[六]

ところで、民衆的正義の正当性を明示的に掲げるまでになったコッカリル邸打ち壊しと監獄襲撃の時点から、叛徒らの行動は世の中をひっくり返さなければならないという極めて強烈なベッソンによって生み出されてくるようである。二〇歳のくつ職人のオルトマンは、母と姉がコッカリルのファブリックで働いているにもかかわらず、否それ故に、コッカリル邸を打ち壊す際には手

斧を持って窓枠、戸扉、家財道具を破壊したり、二階のバルコニーから下の道路に投げ落す。監獄では仲間のベルグラートが門衛に撃たれると近くの酒場まで運んで介抱し、「必ず生き返るさ。」とその酒場の主人に話している。撃たれたベルグラートは間もなく死亡するが、この男も監獄へ行く途中で居酒屋に立ち寄り、

「七時には何か変わったものを見ることになるだろう。その時青い炎がアーヘンに燃え上がるのを見るはずだ。」と主人に話していた。^② 又、一旦はアジテーターから群衆の中に消えた者の一人ヤコビーは、既に市民軍によって鎮圧された後、夜八時すぎにコックリル邸にやって来て逮捕されるが、その時監獄へ彼を連行している市民軍兵士に向かって次のように叫んだと云う。^③

「俺がお前らに仕返しをする日まで待っている。俺こそ最初の叛徒なのだ。これからも俺は最初の叛徒であり続けるだろう。」

① 計量的方法による処理が必ずしも社会緊張の程度を整合的に説明できるものではないことを例証した次の研究を参照された。R. J. Evans 'Red Wednesday' in Hamburg: Social Democrats, police and Lumpenproletariat in the suffrage disturbances of 17 January 1906. In: *Social History*, vol. 4, No.1, 1979, p. 1-31.

② この暴動は治安当局ではなく、同日夕刻に市参事会を中心に結成された武装市民軍（約二三〇名）の手によって鎮圧され、後日到着した正規軍約二六九〇名が治安回復に当った。本稿が利用した史料は数ヶ

月にわたる容疑者一三三名の取り調べの後、ライン州控訴院が翌年三月五日にケルン陪審裁判所に提出した被告七四名についての公訴状、それに加えて二四三名の検事側証人、六七名の弁護側証人による証言録である。これらはすべて次の裁判記録集に収められている。Darstellung der Verhandlungen vor den Assisen zu Köln über die Teilnehmer des am 30. August 1830 in Aachen stattgehabten Aufmarschs, nebst Schlußbemerkungen von J. Venedey, Köln 1831. (以後 Venedey と略す) 又、武装市民軍によって逮捕された叛徒一六六名のリストがアーヘン警視總監 V. ケールスによって九月六日に作成されてゐる。史料番号は Staatsarchiv Düsseldorf, Rep. Regierung Aachen Nr. 204 Bl. 157-161. であらう。

同じくこれらの史料を用いているフォルクマンの研究は本稿第二章註①を参照のこと。

③ Vgl. Werner Conze, Vom Proletariat zum Proletariat, Sozialgeschichtliche Voraussetzungen für den Sozialismus in Deutschland, in: *PSWIG*, Bd. 41, 1984; E. Pankoke, *Sociale Bewegung-Sociale Frage-Sociale Politik*, Stuttgart 1970. ハウヤリスムスに關して、一九世紀前半のそれを解放危機と捉えるこれらの説は西独では既定説となっている。詳細は川本和良「三月前期のプロイセンにおける『社会問題』と社会政策および中間層政策の展開(一)」「立命館経済学』第二六巻第五号、南直人「一八四八年革命前夜のドイツ手工業者」『待兼山論叢』第十七号を参照のこと。

④ この事件のもつてくつかの重要な側面、例えばフォルクマンが論じて社会的原因についてはアーヘン毛織物産業の雇用関係、経営形態、トラックステムの普及など織物業者——家内工業との関係、小経営親方の存在が視野に入ってくるだろうし、アーヘン産業構造全体と各産業部門の景気変動の状況も問題にしなければならぬ。しかし、こ

- ここでは本稿のテーマに関わる限りでのみそれらに言及することとする。
- ⑤ 治安当局者の次のような証言がこの時の不穏な空気をよく反映している。ブレンダモア警部「ブリュッセルから数時間しか離れていないベルビューで起きた暴動がアーヘンに大きな興奮をもたらしただけで、私はすでに（八月）二十六日（木）に市長に会い市民の武装を準備するよう勧告した」。(Vandey, S. 45) V・フィルト地方裁判事「ベルビューで起きた暴動によって、アーヘンに市民軍の組織化を画る必要が見込まれていた。というのもこの数日中に同様の事件の起こる可能性を予測できたからである」。(Vandey, S. 132)
- ⑥ 以下の証言は Vandey, S. 45.
- ⑦ Vandey, S. 79.
- ⑧ この酒場の主人ヨリーナスの証言。(Vandey, S. 90) なお、このことはミューラー自身だけでなく仲間ハックマン、ツェルムファールも認めている。(Vandey, S. 66.)
- ⑨ 学生ウルリックスの証言によると、自分の父親からも噂を耳にしたという友人がいた。ロロミで噂が広がることをよく示す証言は前出の二八日市場での会話の内容を証言した婦人が同じく述べている。
- ⑩ 前出のウルリックスの証言。更に彼の証言に対して主謀者の一人とされたプレムペラーが噂の発端について次のように陳述しているのは興味深い。「日曜日の夜、普段なら四頭立てなのにこの時は六頭立ての郵便馬車がリュティヒから着いた。郵便袋にはフランソの記章がついていたので、アーヘンにも革命が起ることという噂がこのことを源に生まれた」。(Vandey, S. 127.)
- ⑪ 前出ブレンダモアの証言。この時守備隊がこの一団を逮捕しようとしたが脅迫のためできなかった。
- ⑫ 市民軍に加わって活躍した退役中尉グレイセンの証言。彼も三〇日朝市民庁舎に出かけて武装市民軍の結成を呼びかけている。
- ⑬ このレストランの給仕シルの証言。彼は事件当時、金持ちの犬だと叛徒から罵られて暴行を受ける。
- ⑭ Vandey, S. 139. ケレッターのファブリックは、翌年そこで働く一二人の労働者家族のために三階建の住宅を建設するほど有力な毛織物業者であったが、詳細不明。ちなみに一八三一年には毛織物業とそれに関連する針製造業に従事する就業者は、各々二、二七三人、二七六人でその家族成員を加えると総計一、二、二八三人がこれら両部門で生活していた。これはアーヘン全人口の約三分の一に当る。紡績、剪毛機械の導入、蒸気機関の動力採用は各々一八二二年、一八一七年以来徐々にアーヘンで行なわれていくが、一八二九年の調査では「ファブリック・マニユファクチャー・作業所」の項目の内これに入る五一の毛織物のファブリックの中で機械と動力源の二つが導入されているのはわずか一四である。フォルクマンはこうした状態を、「工業化はまだ遅々としてしか浸透していなかった」と述べ、経営形態についても形式的には独立しながら実際は小親方、もぐり親方が出来高払い制度に従って織物、剪毛業者に従属していた、と結論づけている。H. Volkmann, Strukturwandel... S. 558.
- ⑮ この集会の企ては同日午前ネルエッセンのファブリック内で練られ、午後一時五分前に「太いパイプ」の噴泉に集まることになっていた。ネルエッセンのファブリックから実際に抜け出てやってきた労働者は全部で九人だけであった。(Vandey, S. 119.)
- ⑯ 減給処分というのは、不良品による損害を負金の減給で労働者に償わせる制度で、アーヘンでもこの頃一般的に見られた。ただネルエッセンではこの処分が法外に厳しい内容となっていた。ネルエッセン自身は裁判長の質問に対して、「この罰金はファブリックの秩序を維持する唯一の手段である。」と答えている。(Vandey, S. 54.)
- ⑰ 証人ブラッファルトの陳述。(Vandey, S. 159.)

①⑦ 群衆規模は証人によって異なっているが、中核部分はおよそ四、五人、取り巻き部分は数百人から千人くらい迄幅がある。

①⑧ 裁判では弁護人の最終弁論の中でもこの点は注目され、弁論の大部分がこれにあてられているが、興味深いのはそこでは一つのきっかけさえあれば容易に暴走し、無秩序と化す賤民という理解の仕方が表明されている点であろう。又、この賤民という言葉に「仕事嫌い」という形容詞が付けられている点も、一般的な市民の賤民像を示している興味深い。

①⑨ 逮捕者のうち容疑者一三名の職業分類

	人数	%
針製造 毛織物 紡績工 織工 剪毛	9	41
	45	
	12	
	14	
手工業 靴工 仕立工 建築工 その他	30	22
	9	
	3	
	7	
日雇い その他	19	31
	23	
不明	7	6
総計	133	100

Verhaftensliste von 6. Sept. 1830. Staatsarchiv Düsseldorf, Rep. Regierung Aachen Nr. 204 Bl. 157-160
より作成

②⑩ Venedey, S. 148.

②⑪ 何故か、フォルクマンはこの呼びを無視している。逮捕者一六六名の内一二名を除いて残り一五四名がすべてアーヘンで生まれ育っているが、この都市は一七九四年夏のフランス軍ライン左岸進駐と共にそれ以後約二〇年間革命フランスの占領地となっていた。革命から反動の時代を経験してきた民衆が、七月革命の報を聞いて「ナポレオン万歳」と叫んだことの意味は大きく深い。フランスにおけるナポレオン伝説の変容については次の著書から多くの知識を得ることがができる。西川長夫著『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店一九八四

年。ライン左岸の革命期ジャコモン派についての貴重な実証研究をしたものとして Axel Kuhn, *Jacobiner im Rheinland. Der Kölner Konstitutionelle Zirkel von 1798*. Stuttgart 1976. を参照のこと。

②⑫ Dieter Dowe, *Aktion und Organisation. Arbeiterbewegung, sozialistische und kommunistische Bewegung in der preussischen Rheinprovinz 1820-1852*, Hannover 1970, S. 29.

②⑬ コッカリルの邸宅はフリードリヒ・ヴィルヘルム広場の泉に向かって立っており、正面には窓が五箇所並んでその中央からバルコニーが出ていて、その下が玄関であった。打ち壊しによってぼろぼろの窓ガラス、窓枠がなくなった、といわれ、その破壊の凄さが想像される。

②⑭ コッカリル自身の証言によると、既に二九日から市民武装を提案し、この日も朝から市庁舎へ出向き、武装市民軍の結成決定後は自分の住む地区の市民に市民軍への加入を呼びかけていた。彼はこのような活発な行動が打倒対象にされた原因であるとさえ述べている。(Venedey, S. 58.)

②⑮ ネルエッセンで雇われる染色親方シュテッフフェンスとシュネーラーとのやりとりから。(Venedey, S. 54-55.)

②⑯ 司祭のクレッセンがここでシュネーラーやプレムスハラーに説得した時、彼と一語にいたギムナジウム教師シュミットが聞いていた言葉。ファンデンヒルツは一九歳で一応逮捕者リストではしっくり塗工となっているが、この日は午前中農園で空豆を摘んでいた。既婚で前科四犯（暴行と窃盗）。コッカリル（群衆が移動する頃に参加し、打ち壊しと共に監獄襲撃にも加わっている。又、途中何度も酒場に立ち寄り、火酒をあおって、「囚人を解放しよう」、「コッカリルを倒せ」と叫んでいる。判決では一年の強制労働と六〇ターラーの弁償を課せられる。(Venedey, S. 14, S. 77, S. 78, S. 92, S. 93.)

②⑰ Venedey, S. 66. 彼はユダヤ人の両替商の家もコッカリル邸を仕末

してから「又もどってきて」打ち壊そうとしている。証言全体の中では、ユダヤ人への反感を表明する部分はこれのみであるが、動機を考える上で重要な発言であろう。

⑳ 三月前期民衆運動の内面世界を支配する主要な観念としてモラルエコノミー観念を重視、析出しているR・ウィルトとフーズンクは、この観念が現実妥当性を喪失していくにつれて、食糧暴動の他職人ストライキや反ユダヤ人暴動のイデオロギーへと転化していくと主張する。R. Wirtz, *op. cit.*, S. 245.; H-G, Hunsung, *op. cit.*, S. 246 ff.

㉑ *Venedy*, S. 62.

㉒ 四二歳のしつこい塗工兼紡績工、マイヤーの言葉。(Venedy, S. 62.)
一八世紀から一九世紀初頭にかけてドイツ国内で活躍した盗賊団についての研究。C. Küther, *Räuber und Ganer in Deutschland*, Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen 1976 から窃盗行為と金持ちであることはユダヤ商人に対する観念を知ることができる。

㉓ *Venedy*, S. 83.

㉔ *Venedy*, S. 74.

㉕ *Venedy*, S. 91.

五 結 語

アーヘン暴動の全体的性格を食糧暴動の一種として捉えることにははや疑いの余地はないであろう。なるほどネルエッセンの減給処分(『ピンハネ』)を撤回させるために呼びかけがなされたことが蜂起の発端となったけれども、その過程でこの比較的初期的な労働争議を超越して呑み込んでいく、モラルエコノミー観念に

裏打ちされた民衆的正義の実行が公然と表明され、悪徳商人と金持ちの典型像としてコッカリルが打倒対象のシンボルとされるに至った。「コッカリルを倒せ！」という叫びの中に、集まっている民衆一人一人の怒りと願望、苦悩と不安が包み込まれ、同時に集団は結集体へと凝集されていき、街頭における旺盛な行動力を発揮する民衆運動が始まったのである。

このような運動の形成過程の中で、警察・守備隊の登場が彼らに棍棒を持たせ、昂まった緊張感と不安から自己防衛のために初めて行動へと打って出させる契機になったことは重要な意味をもっている。予めこの日の蜂起のために組織と計画が準備されたわけではなかったが、七月革命の余波を受けて連鎖的に生じた隣国ベルギーの諸都市の民衆蜂起に呼応するかのようになり、急速に口頭によって広まった「アーヘン革命」の噂とそれに託された期待感と不安感の渦巻く中で、八月三〇日がその日であるかどうか、賭けさえ行なわれていた事実にも注目しなければならぬ。三〇日が聖月曜日に当たっていたということも、また同様に重要な条件であった。酒場は勿論、仕事場においても昼間から酒を痛飲し、仲間と語りうこの習慣がなければ、おそらく人々はあれほど速くネルエッセンの労働争議の企てを知ることができなかったであろうし、また氣勢を上げる場さえも保証されなかったであろう。蜂

起の最中であつても叛徒らがくり返し酒場に入入りしてビールや酒をおおる姿は、まるで聖月曜日（聖月曜日）の延長そのものであらう。

さらに、普段、聖月曜日に各酒場で培われている社会的結合關係の鎖狀的ネットワークが行動の枠組を提供している点を確認しておかねばならない。針職人と剪毛職人、毛織物職人の間だけでなく、靴職人や仕立職人もいくつかの特定の酒場で出会い、職種を越えて社交の輪をつくり上げていたのであるが、このような日常的な直接の人間關係はそっくりそのままではないにしても行動に移つた際には、傾向として強力な連帯感を生み出している。

射殺されたベルグラートとこれを酒場で介抱したオルトマンズは、各々屋根職人と靴職人であつた。リーダーと目されたV・ミュラーは、ヨナスの酒場で仲間から遊びで第一位を取り、最も屈強な男に贈られる「王」Kingという称号で呼ばれていた^①。また同じくリーダーとして命令を下していたブルムペラーは、ネルエッセンでの争議の知らせを聞いた時、ファブリックにいたが、誰が最も多く針をつくつたかという賭けの賞品である酒を飲んで^②いた。既に二人のリーダーは日常的労働—生活の世界で一定の權威と信頼を勝ち得ていたのである。

こうしたインフォーマルな聖月曜日の酒場を中心とする社会的結合關係は、蜂起のための固有の特別な組織を準備しないでも

蜂起を実現させていく機能をもっているわけであるが、それはまた一つの組織のあり方であるということが許されよう。「自然発生性」の用語が単に無組織・無計画・偶発的というメルクマールで限定されるとすれば、それはもはや蜂起集団の形成の結果としての現象を外的に形容するだけであつて、集団形成の内的メカニズムを形成過程に則して説明するものではない。また、「自然発生性」を前工業時代の群衆行動に特徴的な属性として近代の工業時代の「組織的計画的」行動様式と対照的に区分することは、あまりに単純な二分法であり、三月前期の民衆運動像を歪めることにしかならないと思われる。ここではケーススタディとしてアーヘン一八三〇年の暴動を取り上げただけであるから、安易な一般化は控えねばならないけれども、近代化論的行動様式論によって前工業時代から工業時代への移行期とされるドイツ三月前期の民衆運動は、それをつぶさに追究することによって実はそのような二分法では捉えられないほど多くの注目すべき論点をもっているのである^③。

① *Vandey, S. 66.*

② 被告本人の陳述。(*Vandey, S. 44.*)

③ 民衆運動を、その集団生成のメカニズムとロジックに焦点をあてて考察する以上に、出来上つた結果の行動様式と集合心性の働きを考へることは民衆運動と政治過程とのダイナミックな關係を理解する上

で重要であろう。しかし、このことの困難さと並んで研究の前に立ち
ふさがる問題は、概してローカルな世界を越えることの少ない民衆運
動を、三月前期という政治、社会、文化の各領域で邦ないし地方が非
常に幅広い多様性を保持していた時代に、容易には一括することがで

きないことであろう。本稿が先づはケーススタディを試みた所以であ
る。

(立命館大学非常勤講師)